

武蔵野市エコプラザ（仮称）検討市民会議（第 10 回） 議事要録

- 日 時 平成 30 年 2 月 21 日（水） 19：00～21：00
- 場 所 武蔵野市役所 111 会議室
- 出席者 委員 14 名、事務局 3 名
小澤（紀）委員長、鈴木（雅）副委員長、大沢委員、大谷委員、小澤（里）委員、
上吉川委員、木村委員、佐久間委員、塩澤委員、志賀委員、鈴木（圭）委員、
田中委員、村井委員、郡委員
- 議事等 1 エコプラザ（仮称）の機能について
～委員の活動報告を事例に～
(1) 温暖化啓発活動の紹介とエコプラザへの期待
(2) 水の学校について
(3) 歩きたくなるまち、暮らして楽しいまち
2 環境フェスタ・エコマルシェにおけるアンケート等集計結果について
3 環境講演会「地球温暖化と私たちの未来」について

1 エコプラザの（仮称）の機能について

発言者	要旨
事務局	多様な環境分野の側面から機能を議論するため、本日は、3名の委員の方からご自身の活動について紹介いただく。また、長島委員の異動に伴い、後任の委員の方に自己紹介をお願いしたい。
委員	多摩信用金庫から参加している。昨年も、長島の代理で検討委員会に参加した。後任として務めていきたい。
事務局	エネルギーや水循環、緑の各分野で活動されている3名の委員から、どのような活動をされているか、困っていること、上手くいっていること、エコプラザでやってみたいことなどについてお話をいただき、連携の可能性など、次回以降のエコプラザの機能の議論につなげていきたい。

1（1）温暖化啓発活動の紹介とエコプラザへの期待

発言者	要旨
委員の発表① （組織紹介）	NPO法人太陽光発電所ネットワーク（通称「PV-Net」）で活動している。PV-Netは、太陽光を設置している個人ユーザーの団体で、温暖化防止のためにいろいろな啓発活動をしている。ここ数年一番取り組んでいる事業は、市民から出資を募り、公共設備等に太陽光パネルを設置する市民共同発電所づくりで、地域の集合住宅の方でも、ファンドオーナーとして参加できる。

	<p>これから武蔵野で取り組みたいのは、ソーラーシェアリング。畑に太陽光が入るようにパネルを設置する。農業も発電も可能な生産緑地にできないか考えている。</p>
<p>委員の発表② (温暖化ミニ講座)</p>	<p>いつもの講座を簡略化した「温暖化ミニ講座」を実演する。最近、温暖化の影響を実感することも多い。昨年の九州北部豪雨では、洪水が発生して大きな被害となった。報道では、地震や噴火と同じように「天災」と伝えられたが、そうではない。日本では 50mm ぐらいの集中豪雨は頻繁に発生していたが、温暖化で海水温が上昇し、水蒸気が増えて、100mm の豪雨が発生するようになった。集中豪雨が強くなった要因は人災で、温暖化の影響で豪雨が増えた。被害は日本だけではなく、人の命に関わる大災害が世界中で起きている。</p> <p>また、温暖化というと、熱中症など気温上昇による被害を思い浮かべるが、2010 年を境に寒気が押し寄せるようになり、寒い冬が増えた。昔は、北緯 50 度ぐらいのジェット気流の中に、北極圏の冷たい空気が閉じ込められていたが、温暖化の影響でこの気流がゆるくなり、寒気が南に流れてくるようになったという研究が出されている。また、北極の氷が溶けて、海へ流れて水蒸気が出るようになったので、気流に変化が生じているという研究もある。このように単に気温が上がるというだけではないので、世界では「温暖化」ではなく「気候変動 (climate change)」という言葉が使われており、地球規模で気象の仕組みが変わるほど温暖化の影響が出ている。</p> <p>温暖化の原因は、二酸化炭素などの温室効果ガスが増えているため、南極の氷を掘り出して、65 万年前からの大気を分析すると、二酸化炭素濃度が最高でも 280ppm だったのが、たった 100 年で 400ppm にまで達した。これは、地球規模で温室効果ガスの濃度が変化し、その影響が出ていることを表している。</p> <p>産業革命から気温が 1 度上がったが、大きな地球の表面気温が「まだ 1 度しか上がっていない」という言い方もできるし、「1 度も上がった」とも言える。IPCC では、今のまま二酸化炭素排出量が増え続けると 2100 年までに最大で 4.8 度上昇するという予想が出ている。2100 年と言われて、関係ないと思っている人は多くいるが、皆さんの周りには、2100 年まで生きている子どもは多くいる。今から二酸化炭素の削減に努めれば、なんとか気温上昇を 1 度くらいには抑えられるという可能性もある。</p> <p>気温が 4 度上がるといっても、言葉では分かりにくいので、映像でお見せしたい (映像上映)。気温が上がる幅を色で表現したスーパーコンピュータのシミュレーションで、年が経つにつれて世界各所で気温が上昇している。温室効果は数十年持続するので、昭和から平成で私たちが出してきた二酸化炭素という負の遺産を次の世代に既に背負わせているということになる。</p>

また、途上国では、ダムや堤防等がしっかりと整備されていないため、同じ50mm、100mmの雨でも、被害の規模が数百人、数千人と先進国より大きくなる。あまりニュースで取り上げないため伝わりづらい。先進国の二酸化炭素排出量が、1人あたり9t～10t。中国の排出量が多いのは人口が多いためであり、1人あたりの排出量は先進国の7割ほど。アフリカ諸国など発展途上国は、1人1～2tしか出していない。私たちが無意識に普通の暮らしをするだけで、途上国は温暖化の被害を受けている。

こうした被害を止めるために、気温上昇をあと1度未満に抑えようという目標がパリ協定。1度とした理由は、これを越えると元に戻せない不可逆的な気候変動が起きるため。例えば、グリーンランドの氷はとても分厚くて、平均2000m、富士山の五合目くらいの高さがあるが、これが全部溶けると、海面が7m上昇する計算になり、武蔵野市は水没する。また、南極にはグリーンランドの9倍にあたる氷の塊があり、これが溶けると70mも海面が上昇し、関東平野もほぼ水没する予想。こうした物理現象は、臨界点を越えると止められなくなり、その温度が、あと1～4度と言われているので、あと1度未満にしている。

もう1点不可逆的な気候変動として心配されているのは、海洋大循環。海流の速度が落ちると、ヨーロッパやアメリカの西海岸、日本など、この海流で温度が上がる地域が寒冷化すると心配されており、こうしたリスクを想定してなんとか抑えようとしている。1度未満に抑えるためには、二酸化炭素の排出量が累積3兆tを超えると危険になるが、残りは1兆tである。再生可能エネルギーの普及等の努力で排出量を減らし、2100年にはゼロかマイナスにしないとイケない。あと1度未満（産業革命後2度未満）になんとか間に合わせるために世界全体の二酸化炭素排出量を2050年までに50%削減し、今まで大量に排出してきた先進国は80%削減するという目標は2009年の先進国サミットで合意されており、2015年に合意されたパリ協定では中国など新興国も含めた世界中の国が削減目標を提出するに至った。日本は2013年比26%削減（1990年比18%削減）を目標に掲げている。

そして、今始まっているのが「脱炭素革命」。昨年、フランスとイギリスが、ガソリン車の販売を2040年以降禁止すると表明した。それに追随する国も出てきて、EVシフトが始まろうとしている。また、中国も2019年から段階的に規制すると打ち出した。大気汚染対策と自動車産業で覇権を取ることを目的にしている。最も象徴的なのは、UAEなど石油で栄えた国が、太陽光発電へ何千億円と投資を始めていて、世界がこうした流れにある中、日本は周回遅れぎみの状況。

日本の家庭での二酸化炭素削減目標は40%だが、計算すると「1週間のう

	<p>ち、3日は電気もガスも使わない生活をしてください」ということになる。まずは省エネに取り組み、省エネ家電や省エネ住宅に注目していただくことで、二酸化炭素を最大 30%ほど減らすことができる。電気代も得になることも、あまり知られていない。</p> <p>ただし、意識が高い家庭で省エネを進めても、市全体、日本全体でみたら、エネルギー使用量を減らすのはおそらく 10%か 20%削減が限界。生活に必要な電気やガスは、再生可能エネルギーに切り替えていくしかない。ガソリン車もEVにシフトして、その電気も再生可能エネルギーにする。</p> <p>太陽光パネルの設置や電力自由化で再生エネルギーを使っている電力会社を選ぶことを検討しようという講座の中でも、温暖化ミニ講座を行っている。アンケートでは、7～8割の方から「こんなに深刻とは知らなかった」という感想があり、温暖化や再生可能エネルギーについては、講座の参加者には伝えられていると思う。</p>
<p>委員の発表③ (温暖化啓発活動の課題とエコプラザへの期待)</p>	<p>エコプラザの事業は市の事業で、環境啓発が全てエコプラザの仕事ということではなく、市の環境啓発事業の中で、エコプラザが担う部分を仕組みで担保できると良いと思う。温暖化については環境政策課が担当すると切り分けるのではなく、大局的な位置づけも必要で、この辺りがエコプラザの機能にも影響してくると思っている。</p> <p>前回話題に上がった「コレクティブ・インパクト」は、行政だけでなく、NPOや事業者が協働で各々が当事者意識を持ち、成果指標を共有して役割分担する。従来の市民協働のように、補助金を出すのでNPOで努力してほしいといった主従関係ではない役割が必要。</p> <p>私たちNPOが一番課題と思っているのは、人が来ないこと。広報の力が無い人も多く、広報に協力してもらえ先を開拓していく力もない。「自力で頑張っている方もいるので頑張してほしい」というスタンスは、コレクティブではない。エコプラザには広報ルートづくりを期待している。</p> <p>啓発力については、範囲が広く、世界的なIPCCの報告から、身近な省エネ住宅まで間違いのない情報を伝えるのはかなり大変で、個人の努力に依存しているところがある。その基礎力をレベルアップするための人材育成も必要と考え、東京都、環境省、大学等と連携して人材育成の仕組みがつくれないうと思う。また、省エネに取り組もうとする人が求めるのは、「どこのメーカーのものが良いのか？良い業者を知っていたら紹介してほしい」という情報で、中立性を保ちながら正しい情報を提供することが求められていると思う。</p> <p>二酸化炭素を削減した成果がすぐに見えるようなツールの開発にも期待している。小平市の環境家計簿は市のHPにあり、使用した電気、ガス、水道、ガソリンの使用量を入力すると、それを二酸化炭素排出量に換算してくれる機</p>

	<p>能がある。小平市の地図（資料P20）が出てきて、地域別の二酸化炭素排出量の増減が図で見られるようになっていたので、地域別のランキングを公表すれば、地域や市として取り組みの盛り上げに貢献できると思った。</p> <p>NPOは資金体制が厳しく、組織体制が固定していて、毎年高齢化している。人件費を払ってまで雇用しようという気持ちが私たちにはないことにも起因している。例えば、ふるさと納税の使い道を特定し、宣伝して資金を集められないかという考え方もある。</p> <p>施設としてのエコプラザには、低炭素住宅のモデルルームのようなものができたら良いと思う。</p> <p>我が家の次の世代である子どもは2100年に98歳。この子のためにということも含め、エコプラザを核にして、人に迷惑をかけない低炭素社会を、率先して取り組んでいけると良いと思う。</p>
委員	<p>小平市の取り組みは、武蔵野市でもぜひやったほうが良い。新武蔵野クリーンセンター（仮称）施設・周辺整備協議会では、クリーンセンターの周辺地域を「低炭素社会のモデル」にしていこうとしている。そのためには、このように見える化することが大事だと思った。小平市の例はすごくわかりやすい。これは簡単にできるのか。</p>
委員	<p>費用については、300万円位だったと思う。</p>
委員	<p>市役所で何年か前に市全体のエネルギーについて方針を検討した際に、町丁目別にエネルギー使用量を算定した。調べようと思えば調べられる。先日、環境省や気象庁などがまとめた報告で、日本の推計値として今世紀末に最大5.4度まで上昇するかもしれないと発表された。温暖化は喫緊の事態になっていると思う。委員からの発表にもあったが、私も日本は気候変動については、世界から圧倒的に意識が低く周回遅れだと思う。なぜ、日本の気候変動に対する意識は低いと思うか。</p>
委員	<p>環境問題に関する情報の入手先をアンケートで聞くと、テレビが70%程度で最も多い。NHKスペシャルでも、大地震、噴火と並んで気候変動を紹介しているが、これらは「天災」で自分たちが原因だとは思えないようなつくり方になっている。もう1つは学校教育だと思う。日本では、中学校2年生の授業で地球温暖化が少し出てくる程度だが、ドイツやイギリスでは、今のような話を小学校の授業で学び、エネルギーのシミュレーションまでやっていて、情報が入ってくるルートが違う。</p> <p>啓発活動は人と会って伝えていくしかないが、人が来ないことが最大の課題。温暖化の学習会と言っても人が来ない。小平市の防災環境フェアでは商品券5千円が当たるといっているので、行列ができていたが、それが現実。温暖化学習会に10人しか来ない現実を踏まえて、啓発活動を行っていく必要があると思</p>

	う。
委員	<p>昨年のCOPの報道を見ていると、日本の報道のほとんどは、トランプ大統領の発言・動向を取り上げている。現地で日本バッシングがあり、日本がインドに火力発電所を輸出していることを批難されたことは報道されていない。中国の温暖化対策が進んでいないイメージが日本では刷り込まれているが、太陽光発電においては、中国は先進国である。このような現状認識が日本でされていないことも問題だと思う。</p>
委員長	<p>日本は表層的にしか物事を見ないように変えられてきたように思う。覚える必要はなく、深く考えることが必要。例えば、気温上昇の抑制の話があったが、こうした対策を行うことで上昇を1度未満に抑えられるというシナリオを誰も説明しない現状もある。統一性をもって、クリティカルに進める必要がある。この発表を通して、地域で、武蔵野市で、そして多摩地区で考えていくことの問題提起がされたと考えてもらえれば良い。</p> <p>そして、気候変動の影響の例として、作物の植え付けの状況が変わってきている。そのような情報をわかりやすくどのように提供していくか、地域の方々がどうすれば活動しやすくなるのかということが、エコプラザの機能についての問題提起になる。いろいろなデータがあるが、私たちはそれを読み取る力を付けなければいけない。琵琶湖の生物が生息するには、台風によって水が攪拌されることが必要というように、深い学びにつながるように、啓発活動をどう進めるか考える必要があると思う。</p>
委員	<p>温暖化は大きな問題。大きなことから身近なことまでいろいろ影響がある。国が政策をしっかり整備していないために、市民が立ち上がると思う。エコプラザが武蔵野市の中に留まらず、大きな位置づけができるかもしれない。政府の機関も含め、啓蒙・啓発施設において、ヒエラルキーがあるかどうか。</p>
委員	<p>8割方は国の制度が大事だと思う。節約して頑張っても、減らせる二酸化炭素は10%程度。あとは電気の再エネ割合を増やすしかない。そうでなければ40%、50%は減らせない。エネルギーの使用量を半分にし、江戸時代のように暮らすことは無理。国の政策を変えていかなければいけない。NPOや個人として、国のパブリックコメントに意見を出しても効果はないが、議会や首長が、温暖化対策について国へ提言している自治体はある。武蔵野市や三鷹市、小金井市など、周辺の自治体で国へ制度転換してもらいたいことを発信し、対策することで、国への影響力が強くなるのではないかな。</p>
委員	<p>武蔵野市の農家の取り組みについて話があった。農家とも付き合いがあるので、情報をいただきたい。</p>
委員	<p>先週、千葉県にあるメガソーラーシェアリングという施設を見学した。現物を見るとインパクトがある。それが、例えば南町市民農園にあると良いと思う。</p>

委員長	山梨県北杜市などでの太陽光発電の様子を見ると、景観と相入れないところがあると思った。これから再生エネルギーの促進と景観との兼ね合いをどうしていくべきか、武蔵野市でも考えないといけない。ドイツのシュトゥットガルトの都市計画では、まちの中を流れる風をまず考え、そのために緑をどうする、都市をどうするかということまで計画に入っている。どこでも太陽光パネルを付ければ良いということではない。
委員	千葉県のソーラーシェアリングは、藤棚やブルーベリーの棚があり、畑と調和して、景観を損ねることはなかった。今度ぜひ一緒に見に行きたい。

1 (2) 水の学校について

発言者	要旨
委員の発表 (資料 P. 1)	水の学校は、平成 26 年にスタートした水に関する市の事業で、下水道課主体で始まった。水に関する様々なテーマを取り上げて、楽しみながら理解を深める、行動につなげる参加型連続講座と位置づけられている。毎年 30 名ほどの受講生が参加し、毎回必ずワークショップ、ブレインストーミングを行っている。体験や見学を通して気がついたことを、お互いに共有する時間を設けている。自分では気づかなかった見方にお互い驚くこともあり、常に気づきの場を設けることが重要と感じている。
委員の発表 (資料 P. 2)	平成 29 年度の連続講座の内容を見ると、6 回のうち第 2 回は上水道について、第 3 回は、水再生センターを見学する下水道の講座、第 4 回は、地形から見た東京の湧水や、雨水の流れについてといった内容のように、常に下水道に限らず、いろいろな視点から水に関わることを学ぶ講座になっている。
委員の発表 (資料 P. 3)	平成 27 年度には、水の学校の取り組みが、第 8 回循環のみち下水道賞・国土交通大臣賞を受賞した。下水道の役割、重要性、魅力、可能性などに気づき、共感し、行動してもらうための効果的な広報活動や環境教育の取り組みが評価された。この賞の価値というよりも、こうした賞を受賞したことによって、受講生も修了生もモチベーションが上がったことに価値がある。特に受賞時は、既に第 1 期の修了生がサポーターとして活動していた時期だったため、これからの活動に向けて、サポーターの励みになったという点で良かったと感じた。
委員の発表 (資料 P. 4)	水の学校のサポーターは、水の学校の修了生で構成されている。修了生が、次年度から、水の学校の企画運営などにも携わり、次の講座でこんなことをやりたい、やったらどうかと市の職員とも常にお互いに話し合っ、意見も取り入れられている。毎年最終回に修了式があり、2 年目になっても 3 年目になっても、卒業はせず、修了生として活動している。
委員の発表 (資料 P. 5)	連続講座とは別に、サポーターの企画で実施した講座もある。水の学校の連続講座は、6 回参加を義務付けて各回週末に開催するため、連続講座に参加で

	<p>きない方もいる。また、お子さんがいらっしやると、休みの日は出て行けないお母さん方もいる。そこで、連続講座の参加は無理でも、単発講座や子ども向けに何か企画したいという意見がサポーターの中から出た。お子さんの自由研究の題材にもなるので、夏休みにオープン講座を企画した。サポーターは、お子さんへの説明内容も市と話し合いながら一緒に企画し、当日は運営にも携わった。オープン講座のチラシもサポーターでつくって配布している。「地下 25 mの地底探検と玉川上水に出かけよう！」というのは、小平市にある「小平ふれあい下水道館」に行き、地下 25mにある実際の下水道施設を見学した講座。地下の下水道施設までは、階段を下りていくが、そこには関東平野の地層が表示されていて、地層に興味がある方も楽しめる施設になっている。</p>
<p>委員の発表 (資料 P. 6)</p>	<p>サポーター活動の体制を紹介すると、受講生が修了生となって、サポーターとして参加する。サポーターと下水道課は、サポーターミーティングという打合せを開催し、企画のアイデア出しや次回の運営についてブレインストーミングを行う。下水道課は、全体の講座の企画運営や、全体コーディネート、受講生の募集や実際の講座の実施を担い、サポーターは講座の運営支援と、平成 29 年から毎回の講座の報告書として一般市民向けに発行しているニュースレターの原稿を執筆している。参加されている皆さんがどんなことを感じられるのか、楽しくやっているかなどを見ながら、講座の企画に参加し、必死に執筆している。</p>
<p>委員の発表 (資料 P. 7)</p>	<p>水の学校に参加して「もっと知りたい」「もっと他のところも見てみたい」という思いから派生した、サポーター主体の自主活動を紹介します。「井の頭池のかいぼり見学ツアー」では、一昨年の井の頭池のかいぼりに行ったときに、実際に池の中に入って、みんなで湧水が湧いている部分を見るという貴重な体験をした。「仙川探検隊」は、枯れ川になっている仙川の暗渠（地下に設けられていて外からは見えない水溝）になっている部分や、浄水場の洗砂水を使って、川を復活させている部分を見てみようとして川に沿って皆で歩いた。「湧水めぐり」「酒造めぐり」も行っている。「湧水めぐり」は、東京都環境局が指定している名湧水 57 選をめぐっているところで、「酒造めぐり」は、おいしい水があるところには、うまい酒あり、と水つながりでやっている。</p> <p>また、「プロジェクト WET」エドゥケーター講習会に参加した。「プロジェクト WET」は、水に関する体験型の水教育プログラムで、子どもたちが主体的に、アクティブラーニングのようなかたちで、遊びながら水のことを学ぶことができる。エドゥケーター（指導者）講習会は誰でも受講でき、子どもたちに教えるだけでなく、遊びながら自分も学ぶことができる。例えば、地球を模したビーチボールを何回か投げ合って、触った部分が陸なのか、海なのか確認して、陸と海の割合を実際に体感する。また、発電所に勤めたり、お豆腐屋</p>

	<p>さんになったり、いろいろな職業になって、毎日水をたくさん使うことを想定し、水がないと生活できない、川に水が潤沢にあるときは、そのまま皆で使えるが、取水制限が 20%、30%かかったときに、どうやって皆で水を分け合っていくかを考える。上流の側から、「これだけ私もらいますね」と水を割り当てていったら、下流側で職業をしていたり住んだりしている人には水がいなくなる可能性があることを、遊びながら学ぶプログラム。もっと知識を深めたい、子どもたちにいろいろ教えた方がいい方には、そうした資格取得講座などを行っている。</p>
<p>委員の発表 (資料 P. 8)</p>	<p>楽しくなければ続かない、遊びがないと続かないというのが、私の思い。受講生のときは、学校というところで、楽しみながら学ぶが、サポーターになると、自分のやりたいこと、見たいことは、オープン講座で提案して、ここを見に行きたいから見学会をやろうと「大人の遠足」として楽しむ。自分の伝えたいこと、より知りたいことは、サポーターに入っている大学の先生にお願いして、「大人の部活」として勉強する機会をステップアップ講座として提供してもらおう。水の学校の支援という、志が同じ人たちが集まった会なので、楽しみながら遊びながら、決して無理強いもしない、そうしたスタンスでありたいと思って、サポーター活動を続けている。</p>
<p>委員の発表 (資料 P. 9)</p>	<p>昨年 8 月、サポーター向けにクリーンセンターの見学会と、「エコプラザにどんなものを求めているのか」というワークショップを開催した。多世代が交流できる施設、コーディネート機能、環境関連の相談窓口、コーディネートする人材が必要等の意見があった。この会議でも話題になったが、施設名称は公募したらという話も出た。武蔵野プレイスの 1 階のように、学生が勉強している隣で高齢者の方が本を読んでいるなど、様々な方が普通に集まれる場が好ましいと思う。「本物・真実を見る目を養う」というのは、世間にいろいろな情報があふれていて、取捨選択ができるように、本物を知ることができる場所であったら良いという意見もある。最後に、せっかく武蔵野市にある施設なので、「地域を知る」「武蔵野市を知る」ことができる施設であってほしいというサポーターの意見があった。</p>
<p>委員の発表 (資料 P. 10)</p>	<p>今後の課題であげているが、水の学校は、市の事業計画の中では 5 年事業であり、平成 30 年度が節目の 5 年目を迎える。サポーターは水の学校の修了生で成り立っているので、この事業が終わると、新規のサポーターとなる修了生がいなくなり、メンバーの固定化にもなりかねないと危惧している。有志の集まりで、組織だった活動団体ではないので、活動拠点が無い。せっかく深いつながりができたので、気軽に集まって話せる場があると良いと思っている。</p> <p>今回、サポーター活動を「大人の遠足」「大人の部活」とまとめたが、資料の下段で「大人の部活」の今後の展開の想定を記載した。イベントは現時点で</p>

	<p>できていると思うが、何か事業を受注するところまで踏み込む団体ではないので、応募や申請もできない。そうした応募を考えるようになるには、組織化してリーダーも必要になり、組織化されれば、活動費を生み出す必要が出てくると思う。</p> <p>また、毎年水の学校の成果物として、啓発資料をつくるが、平成 29 年度には「水のはそみち紀行」を作成した。これは、市内の水にまつわるスポットや、まち歩きコースを網羅したもの。受講生以外にも、水を切口に市内をあちこち歩いていただけたらと思って作成した。まだ発展途上の段階の資料だが、自分たちも歩いた道を追加してつくっている。</p>
委員	説明を聞いて、市の 5 年事業だということがわかった。どのように市と関わったのか。活動費や活動拠点はどうしていたのか。この冊子をつくるための資金は市役所が提供してくれたのか。
委員	市の水の学校の運営をサポートが支援している。また、冊子の製作費は市から出されており、企画編集はサポーターが担った。
委員	市が受講生を募集したのか。
委員	受講生は市が募集した。
委員長	成果として、水の学校も賞を取ることができたし、大人の遠足、大人の部活、自分でキャリアを開いてきて、とても楽しんでいることが良くわかった。
委員	下水道課で水について市民の方々にも理解してもらいたいという目的で、水の学校という企画を思いついた。そして、市が市民と一緒に学びながら、一緒になって事業を回していく形態をつくりましょうという提案をした。実際に、修了生の方と市が協力できたので、これで終わるものではないと思った。
委員	いくらぐらい費用をあてているのか。
委員	市は、成果物をつくることや見学の運営などのために、年間 200～300 万円ほど使っている。
委員長	修了生としてサポーターが学んでいるし、子どもたちも学んでいて、子どもたちからも学ぶという学び合いができています。お互いに育ち合う関係性をつくっているのが素晴らしい。水の学校で見学に行くのは限定的な期間しかない面はあるが、自治体の人も頑張っていると思う。
委員	武蔵野市の小学生は、上水道か下水道のどちらかを必ず見に行っている。
委員	水の学校を修了された、本当にモチベーションの高い方と出会った。私たちは、今はひたすら活動で汗を流している。学びと活動の両方が相まっていくと良い。できれば水の学校の部活の一環として、私たちのフィールドにもお越しいただきたい。
委員	水については興味がある。啓蒙活動に支障があるとすれば、水の流れが見えないこと。衛生的には、下水道を地下に潜らせると良いかもしれないが、もし

	下水道をこれからつくるのであれば、啓蒙活動として一部分でも良いので透明な管にして見せる方法もあるのではないか。
委員長	小平市が地下 25mに下水道が見える施設をつくったように、実際に見せることで学びが深まる。水から温暖化の問題とつながる展開もできると思う。
委員	今話を聞いて水の学校の取り組みは素晴らしいと思った。どのような年代の方が出ているのか。また、毎年 30 名程の修了生がいるということだが、違った角度で良い話が出てきたり、広がったりした事例があれば、教えてもらいたい。
委員	参加者の年齢層は高齢者が多い。土曜日に 6 回の連続講座への出席を義務付けて募集をしているので、現役世代の方の参加は難しいと思う。初年度は大学生も参加していたが、その環境系の学部が移転したこともあり、次年度以降は大学生が入ってこなかった。サポーターミーティングも平日に行われているため、なかなか参加しづらいが、自立して動き出しつつある。 今は、仙川の暗渠になっている部分や、昔の水みちもあるため、昔の記憶を辿った方がいて、仙川のマップをつくらうという動きが出ている。その方は、武蔵野市にお住まいだったが、自分の同級生を集めて昔の水みちを探そうといった活動にも広がっている。
委員	水の学校には 30 人の方が参加しているということだが、参加する方にとっての魅力はなんだと思うか。
委員	座学だけでなく、様々なところを見に行くことができる楽しみがあったと思う。1 年目は奥多摩に武蔵野市の水源地を見に行く講座もあり、お楽しみ要素があったことがポイントだったかもしれない。
委員	あとは、毎年市がバッジをつかって、修了式の時に市長から修了生にバッジを渡している。毎年図柄が異なっていて、講座にバッチをつけていらっしゃるサポーターの方もいる。

1 (3) 歩きたくなるまち、暮らして楽しいまち

発言者	要旨
委員の発表	私のような主婦がどう考え、緑や環境の活動をしようと思ったかを中心にお話ししたい。 子育て時代に、ベビーカーを押していると、道の段差が激しく、子どもの頭もガタガタと揺れ、危険な場所が多いと思った。そこがまちづくりへの興味の原点になった。車椅子の方はどんな生活をしているのだろうか？など子育てを通して視点が広がった。転勤で大阪に引っ越し、豊かな緑に囲まれた住宅に住んだが、その緑を潰して目前に大きなマンションが建つことになり、行政の担当者話を聞きに行った。そこには企業側、行政側、住民側それぞれの論理があ

った。子どもたちと歩きたくなるまち、住みたくなるまちをつくるには、自分がどう関わられるのかと思いを巡らせて過ごすことになった。その後、実家のある武蔵野市に転入し「緑のまちづくりレポーター」という活動に参加した。ランドスケープの勉強が必要と考え講座を受け、最終的にはまちづくりや市民参加について3年間大学に通学した。

前回の緑の基本計画策定の際に委員として、広報活動が必要と提案。自分が提案したことは実現したいと思い、「みちまちみどり」という情報誌を発刊したが、発刊までも困難な道のりだった。製作費は手弁当だったが、企画を持ち込み、地元の企業が印刷費を出してくれるところまではこぎつけた。仲間は、フルタイム勤務のため、深夜12時頃から集まることもしばしばあった。苦労を重ねたが、取材を重ねているうちに次の課題が見えて、学ぶことも多かった。しかしその後、印刷費を提供してくれた企業が手を引いたため、資金源を根本的に考えなくてはいけないと気付いた。お金の集め方から、広報、営業の仕方までを教える起業塾に通い、法人格が必要と考え、取得した。「みちまちみどり」は2005年から継続し、紆余曲折を経て今年で13年目、30号になる。

子どもの頃から「色」が気になっていた。景観を専門とする教授からのお誘いがあり、色彩の研究団体に参加している。市内で色のワークショップを実施した。武蔵野の色について仲間でカラーハンティングをして、井口家の大椿、立教女学院の藤、玉川上水の新緑や紅葉した葉の色などをチェックした。多くの方に色彩を身近に感じてもらえるように「むさしのくれよん」をつくった。最終的に、色彩景観につなげたかった。今はオレンジリボンの募金のお礼に障害者支援施設の方と一緒に作ったオレンジのクレヨンをプレゼントしている。

「もったいない」をデザインすることも考えた。フラワーデザイナーをしていたこともあり、開店時の飾りの花の枯れたものをいただき、干して、色分けをし、子どもたちとのカードづくりや、アートセラピーなどに活用した。その際「カーボンフットプリント」の話をした。バラは温度管理や空輸などで、二酸化炭素を1本につき約1kgの排出、国産の小菊だと1本約45gの排出と言われている。豪華で珍しい切り花はこんなに二酸化炭素を多く排出して、商品として飾られることを話すことも行ってきた。

着物や古布が好きで、それをいかした製品をつくる「縫縫(ちくちく)」というブランドを立ち上げた。着物をほどこ時間はなかったので、障害者支援施設の方にお願ひし、徐々に上手にほどこしてくれるようになり、今は施設の職員と一緒に古布の商品研究をしている。

最初にお話した子育て時代以来、道路のことがずっと気になっていて、この「辻」という冊子にその思いを仲間とまとめた。東京都道路整備保全公社に企

	<p>画を持って行き、助成金の案内や企画に対しご意見をいただいた。一般の人が交差点や道に興味を持つ仲間を集めたことに驚かれた。私の体験や興味対象を話すと市民、企業、行政、財団等の多くの方と課題が共有でき、立場が違う仲間が広がった。</p> <p>昨春発行した、「むさしの桜マップ」は、初めて企業スポンサーを集めて自主発行をした。2市にまたがる小金井公園の全域を掲載することができた。自主発行した証しとして、その小金井公園を表紙にした。「このページを買ってください」、と言うことは恥ずかしかったが、今年になり「今年は桜マップ発行しないのですか？」とスポンサーさんから電話があり、企業側にもメリットがあることを実感し、恥ずかしいと思う必要はないと安心した。</p> <p>桜の調査をすると、この地域には予想以上に桜が多いこと、また多様な品種が植えられていることが分かった。公共空間にも珍しい桜の木が植えてあるのに、品種がわからない木も多く残念だと思い、多摩産材の端材を使って、友人の書家にお願ひし樹名板をつくった。</p> <p>桜だけでなく椿も調査している。チャドクガが発生するため、公園に椿は植えない方向だが、茶人にとって、椿は大事にしている花。市内の椿好きな家が何軒も見つかっている。「むさしの椿ツアー」をすると声をかけたら、参加者が海外の方ばかりで驚いた。日本文化と椿の深い関係にとっても喜んでくれた。</p> <p>こうした活動を、「2011年のツナガリ展」や、「コピス吉祥寺 環境まちづくり展」など、自主的に発表する場をつくっている。「花のある暮らし」を提案しようと、0123 はらっぱ（子育て支援施設）と組んで講座を開催したときには託児付き講座にしたため、お母さんたちは大変いきいきして嬉しそうだった。講座の最後に、「今後、緑に関することで自分はどんなことをしたいか」という宣言書を簡単に書いてもらったら、前向きな公共性の高い言葉が聞けて短時間で同じ気持ち共有でき、驚いた。</p> <p>市民としてどうやって環境やまちづくりに関わっていききたいかと考えたときに、子育て時代に感じた「こんな風景が広がったまちを、私は歩きたい」、「こんな人たちがいるところで、私は暮らしたい」、という思いが根本にある。誰もが暮らしやすいまちになっていったら良いと思っている。</p>
委員長	<p>エコプラザの機能をまとめてもらった気がする。委員のように、人を呼び込む力をエコプラザで実現できればと思う。</p>
委員	<p>今日は、3名の委員から活動内容を聞かせてもらって、自分の意識の低さを少し反省した。武蔵野市には15年住んでいるが、皆さんの活動をこの検討会議に出るまで知らなかった。エネルギーの発表を通して、環境問題について耳には入っているが、そこまで深く考えてこなかったことに気付かされた。皆さんはかなり大々的に活動されているが、「なぜ知らなかったのか」と改めて思</p>

	<p>う。まちの中を歩いてみたり、武蔵野プレイスに行っていたが、やはりわからなかった。実際にエコプラザを通してこうした活動を知らせようとしたときに、今までどおりのやり方、施設をつくるだけでは、ただ生活している人には届かない可能性がある。そこは真剣に考えないといけないと思い、反省している。</p>
委員長	<p>この検討会議に参加している方は、地域の中でつなぎ役になっていくと思う。1人に声をかけると、その家族や友人に声をかけたことになる。ちょっと桜を見に行つたついでに、エコプラザを工事している所も見せようと、自分のやりたいことも湧き上がってくるかもしれない。人に声をかけてみるのも大事かもしれない。</p>
委員	<p>一番力があるのは、人間と会って話をし、知り合いになること。インターネットで宣伝してもなかなか参加してもらえない。このような話をした後に誘ってみると、行ってみようという人も出てくる。発表資料をつくる際に、“同伴促進”という言葉を書いてみたが、消した。知っている方をぜひ誘ってきてほしいという思いもある。面白かったので来てみないか、と声をかけることも今後トライしてみたい。</p>
委員	<p>環境へのつながりを考えると、雨や湧水なども温暖化の話につながっていく。また、エコプラザの工事現場を見る話があったが、壊すことから始まっているのがドキュメントではないか。旧クリーンセンターを壊すという衝撃的なことを記録して、エネルギー収支はどうなるのか、中にある備品等はどうか、コンクリートを壊さないように工夫したことなど、そうした話が串刺しになってつながっていくと思った。</p>
委員長	<p>貴重なご意見だと思う。</p>
委員	<p>現在、旧クリーンセンターを壊している最中だが、あの壊されている姿は貴重で、あれだけで保存できないのかとも思った。壊されているのは今しか見られない。写真だけでは足りないため、あのような風景も必要だと思う。原爆ドームを残したことに意味がある。壊れかけたものを活用できないかとも思った。</p>
委員長	<p>解体のプロセスは写真を撮っていると思う。基礎を掘って、コンクリートの塊をあの重機でどれだけ細かくしていくのかと驚く。こうした現場のことも子どもたちに伝えたい。現在、環境教育促進法の改定をしており、そこでのキーワードは「つなぐ」ということ。若い方が参加することにより、つながっていくと思う。</p>
委員	<p>私の住んでいる武蔵野緑町パークタウン建替時の活動を紹介したい。昭和58年から公団が建て替え事業を始め、平成3年に緑町団地が建て替えの指定を受けた。今までと全く違う高家賃の高層住宅にする計画で、既に建て替えた</p>

	<p>団地を見学に行き、危機感を持った。建て替え対策委員会を立ち上げ、自分たちの団地について思いを集めた文集をつくるプロジェクトや、暮らしやすい間取りを研究する間取りプロジェクト、さらに団地の住環境を知ろうと環境プロジェクトに取り組んだ。高家賃を心配して移転が続き、居住者が減少する中で活動へ参加する人は少なかった。そこで、昼間団地内で過ごすことの多い、幼児のいる若いお母さんたちに声をかけ、団地のウォッチングから始めたが、意外に自分たちの住んでいる団地でも知らないことが多いことに気がついた。植物の専門家と一緒に散歩したり、野鳥の会の方と団地に訪れる鳥を観察したり、近所の子どもたちがどのような公園が好きかを調べたりして学びながら、どんな団地や公園をつくりたいのかをみんなで考えていった。すごく面白かったが、「私たちはこんなに団地が好きだ」ということを伝えることが一番大変で、いろいろと勉強になった。活動の中で制作した団地の展示物は公団との交渉に使うだけでなく、地域のお祭りやイベントで展示したり、発表会をしたり、伝えることを続けていくうちに、自分たちはどんなところに住みたいかということがわかるようになった。このような経験があったため、集会所の前に太陽光発電をつくってはどうか、団地内の「辻」など人の出合いをどのようにするか、エントランスをどうつくるかなど、みんなで話し合うことで、自分たちに自信が持てるようになった。この経験と先ほどの発表に共通点を感じた。そうした異なる分野がつながるエッセンスがエコプラザにもあるのだろうと思う。</p>
委員	<p>本日の話は非常に勉強になった。委員長がつないでいくことが大事だと言うように、それぞれが行っていることを、つなげていくことが大事だと思った。例えば、先ほど、委員から椿はお茶にとって重要だという話があった。そのお茶をたてるために水が必要で、その水をどうやって得て、どのようなエネルギーで沸かすのか、そこから環境を考えていくということは大切なことかもしれない。つなげて考えていくのはエコプラザの重要な機能なのだろうと思い、「つなぐ」という観点から検討するのも良いと思った。水の学校サポーターの活動場所がなければ、エコプラザができるまでは緑町コミセンを使っていたきたい。緑町コミセンでは、ひろば利用という方法を検討していて、誰もが利用できるようにと考えている。ひろばで、水について関心を持っていない人に伝えていく活動も可能だと思う。</p>
委員	<p>水の学校が始まったときのテーマは、「水がどこからきて、どこに行くのか」という漠然としたもので、何をやっても良かった。いろいろなことが扱えるので良かったかもしれない。</p>
委員	<p>エコプラザができて何人来たかということは、あまり気にしなくても良いと思った。いろいろな分野がつけられるというのは、すごく活動しやすくなる</p>

	と思う。成果よりも、緑町コミセンに、エコプラザに来てくれた、参加しやすいということが重要で、何人来たかではないと思った。
委員長	人数で評価するだけではなく、学びによる個人能力の変容を質的に、総合的に評価するポートフォリオ的な評価の仕方もある。

報告事項

2 環境フェスタ・エコマルシェにおけるアンケート等集計結果について

発言者	要旨
事務局	時間の都合で報告事項のアンケート集計結果については、次回の会議の冒頭で簡単に説明させていただきたい。

3 環境講演会「地球温暖化と私たちの未来」について

発言者	要旨
事務局	環境講演会「地球温暖化と私たちの未来」を3月24日（土）午後2時から西棟811会議室で開催する予定。講師に国立環境研究所の江守先生をお招きし、地球温暖化についてご講演いただく。先生のご専門は温暖化の将来予測とリスク論。わかりやすい講演、講義が好評で、NHKの日曜討論や日本テレビの世界一の授業などテレビにも出演している。委員の皆さまにもぜひ、ご参加いただきたい。